

	論文の和文要旨
論文題目	動詞の意志性について —タイ語・日本語の対照研究をめざして—
氏名	ブッサバー・バンチョンマニー

本研究は意志性という観点からタイ語と日本語の動詞について考察し、その違いを明らかにするものである。意志性という用語は金田一（1941）の論文で使われはじめ、それ以来日本語の研究に広く使われているが、この論文では、意志性を「主語が動詞の表わす事態の開始をコントロールできること」と定義し、分析を試みた。例えば、「食べる」、「読む」などは意志動詞とし、「死ぬ」、「びっくりする」などは無意志動詞とする。その結果以下のようなことがわかった。タイ語では動詞の意志性の有無が動詞の形式に現われるが、日本語では意志性の有無の違いは形式的にはあまり現われない。この事を証明するためには次のような構文や語彙を取り上げて検討を重ねた。

まず、タイ語では次のような諸現象において動詞の意志性によって異なる用法が観察される。それは動詞連続の解釈、動詞連続における否定辞の位置、可能文における否定辞の位置、疑問終助詞 *máy* の使用条件、対象に変化をもたらす他動詞文における主語の意味役割等の現象である。

動詞連続の解釈はその一連の動詞の意志性と二つの事態の生起の時間関係によって解釈が異なる。後項動詞が意志動詞であるかあるいは無意志動詞であるかによって解釈が違ふ。後項動詞が無意志動詞であり、かつ二つの事態の生起時間が継起の場合、後項動詞が前項動詞の結果であると解釈され、「結果構文」と呼ぶ。それ以外は「連動構文」と呼ぶ。つまり、

後項動詞が意志動詞で、二つの生起時間が継起の場合は後項動詞が前項動詞の目的であり、同時の場合は後項動詞の前項動詞を修飾していると解釈される。後項動詞が無意志動詞で、同時関係の場合は後項動詞が前項動詞を修飾していると解釈される。

これに関連して、動詞連続の否定辞の位置は連動構文と結果構文とで異なる。連動構文である場合は否定辞は前項動詞の直前に置かれ、結果構文の場合は後項動詞の直前に置かれる。可能文においても動詞連続の否定と類似現象が見られる。つまり、可能を表わす動詞は結果構文の後項動詞と通じるところがあり、否定辞は後項動詞の直前にしか置かれない。

疑問終助詞 *máy* に関しては過去の場合、意志性と密接な関係がある。過去の意志的な事柄を疑問文にする場合、*máy* が用いられない。これは否定辞 *máy* と *mây* *dâay* と関係がある。*máy* が用いられるのはその疑問文を選択疑問文 *~rũu máy* *~* (*~か~ないか*) に置き換えられる場合のみである。選択疑問文においては *rũu máy* と *rũu máy* *dâay* の使い分けはまた意志性と関係がある。過去の意志的な事柄には *rũu máy* ではなく、*rũu máy* *dâay* を用いなければならない。

対象に変化をもたらす他動詞文における主語の意味役割について言えば、タイ語のこのような動詞は主語が意志的に対象に働きかける場合しか用いられないが、これもタイ語の場合はこういった他動詞はあくまでも意志的な場合に限られ、無意志的な場合には別な動詞が当てられると言える。

以上の現象は日本語では見られないものなので、他動詞の問題以外はタイ語の現象のみを検討した。タイ語は動詞の意志性の違いが形態に影響していることが明らかになった。次に、意志性との関連性において両言語に違いが見られると思われるいくつかの構文と語彙を取り上げ、対照を試みた。

(1) 使役文における意志性の有無はタイ語では使役動詞が複数の形式を持っている。どんな使役動詞が選択されるかは、補文の動詞の意志性で決まる。意味解釈もその形式によって異なる。一方、日本語の場合、使役動詞の形式には現われるのではない。形式には現われないうが、動詞句の意志性の有無によって解釈は異なる。両言語の使役文の用法を見るとタイ語では、形態的に動詞の意志性が現われるのに対して、日本語では意志性は形態的に現われていないと言える。

(2) 受身構文に関しては、タイ語の受動文には①被害の意味を伴う②動作主が存在す

る③動作主体から受動文の主語への働きかけの直接性、といった使用条件が観察された。

基本的には以上の三つの要素が揃わないと受動文が成り立たない。但し、①の「被害の意味を伴う」に関しては英語などの外国語の影響で、この条件が弱まってきたが、②「動作主の存在」③働きかけの直接性は依然として変わらない。②の「動作主体の存在」が前提であるということは、受動文の主語の受ける動作は「動作主の意志的な動作である」と言うことができる。言い換えると、タイ語では、「(動作主の)意志的」という特性は受動文の成立のための前提条件となっているといえる。一方、日本語の受動文はタイ語と比べて、広範囲に使用されている。形式の面では、同じ受動文の形式をとっているが、解釈が意志性によって異なる。

(3) 日本語の「てある」構文に関しては次のような結果が明らかになった。「てある」構文の前接動詞としては意志動詞も無意志動詞も現われ、意志的動作も無意志的動作も表わすことができる。一方、「てある」構文に相当するタイ語はwayまたはmii...yuu になっているが、その使い分けは mii...yuu は対象のある場所に存在するという状況の描写に用いられ、way は動作の主体に何らかの意図がある場合に限り用いられる。状況の描写と動作主の意図的な行為を動詞の意志性と結びつけて考えると、何か意図があって物事を行なう場合は意志的動作であるが、状況の描写は意志性に言及しない。従ってタイ語との対象から日本語の「てある」構文では、意志的な動作も無意志的な動作も用いられ、両者が区別されていないことがわかった。

(4) 目的節に関しては、タイ語ではphua (-cà?) 節は意志的な動作を表わす動詞のみと共起する。無意志的な動作を表わす動詞との接続の場合はhayまたはdaayを挿入する必要があり、意志性の違いで異なる形式をとる。日本語の場合は「ために」と「ように」の二つの形式が用いられるが、これらは意志性の違いで使い分けられるのではなく、主文と補文との意味的な結びつきの度合いの違いで使い分けられている。主文が補文の実現にとって確実な方法であると話者が判断する場合は「ために」を使い、主文は補文の実現にとって確実な方法ではないと判断する場合は「ように」が用いられる。

(5) mooŋ, duu/hénと「見る」／「見える」の違いに関しては、mooŋ, duu/hén は意志的動作と無意志的動作という対立をなしている。一方、「見る」／「見える」は視点の

違いによって使い分けられている。「見る」は視覚者の側に視点をおく表現であり、「見える」は視覚の対象に視点をおく表現である。

すべてのタイ語動詞の語彙的な意味に *mooŋ*、*duu/hɛn* のように、意志と無意志の区別があるわけではないが、日本語と比較すると、日本語の動詞は同じ動詞が意志的な用法も無意志的な用法も兼ね備えており、それらの動詞を二つの同音異義語として扱うべきかどうかは今の段階ではわからないが、タイ語ではそれらの動詞は形式の異なる動詞が与えられている。

日本語の方は一つの形式で、表わす意味こそ異なるが、無意志的な動作も意志的な動作も表わしうる。タイ語の方は意志的な動作を表わす形式と無意志的な動作を表わす形式がそれぞれ異なる形式が用いられる。

以上はタイ語と日本語で異なる振る舞いをするものだけを取り上げた。日本語にもタイ語と同様に動詞の意志性によって違いが見られる現象はあるが、それらの現象はタイ語との対照においてあまり違いは見られず、今回は取り上げなかった。そういったものの例として可能文、希望表現、等がある。

以上の検証でわかるようにタイ語と日本語の様々な現象を対照して見ると、日本語では一つの形式しかないところをタイ語では意志性の有無によって異なる形式が用いられることが明らかである（使役文、受動文、てある構文）。また、日本語に二つの形式があってもその二つの形式の使い分けは意志性の違いではなく、別な対立が存在すると言える（「ために／ように」、「見る／見える」）。このことは何を意味するかというと、タイ語は動詞の意志性の違いによって異なる形式が選択され、日本語では動詞性の違いによって異なる形式が用いられることはタイ語ほど多くない。しかし、このことは日本語に意志性という概念が存在していないという意味ではない。意志性は普遍的なので、日本語の中にも存在し、重要な概念の一つであるが、その現われ方としてタイ語のそれと違うということなのである。

このことを証明するには様々構文や語彙を検討する必要があるが、それには相当の時間が必要であろう。この他にも検証しなければならない構文や語彙があるが、本論文における研究は意志性という普遍的な概念を明らかにする礎になるはずである。

意志性は言語に関する研究にとって重要な概念でありながら、これまでに「意志性」を取り上げた研究が少ない。本論で意志性を取り上げ、タイ語と日本語との対照によって新たな局面を発見することができる。この研究の成果が日本語教育およびタイ語教育の発展に寄与できれば幸いである。